

各療法での子どもの活動性の差が関係していると回答があった。

II ま と め

本部門の発表は精神薄弱児の心理特性に関するものと、精神薄弱児の心理療法に関するものに分けることができよう。前者については精神薄弱児の行動特徴をもとに、それを指導・教育に結びつけていくための模索であるといえる。今後の研究の発展がまたれる。後者には討論の多くの時間が費やされ、療法の組合せや

治療効果の評価など方法論についての論議が中心であった。障害幼児のこの分野の研究が更なる発展をとげるためにも、方法論の確立が急務である。いずれにしても基礎的研究の進展とともに、障害児の教育実践に向かった研究が現場から強く求められている現状をいかに認識するかという問題が研究者にかかわっている。この部会がこの問題にいかに対処しえたかは参加者各人の評価にまつほかない。

(藤本光孝・大友 昇)

臨床・障害 (727~734)

- 座長 石 井 武 士・松 下 淑
- 727 構音能力を中心とした精神薄弱児の言語に関する検査と一考察
広島大学 船 津 守 久
- 728 幼児の語音弁別能力 III
— 語音弁別, 模唱訓練と構音の獲得 —
愛知教育大学 松 下 淑
- 729 小顎症ならびに神経学的障害 Goldenhar's Syndrome をもつ子の言語発達 (II)
明治学院大学 野 口 明 子
- 730 ろう幼児の身振語の発達
東北大学 坂 本 幸
- 731 弱視児の読書力の重判別関数による検討
国立特殊教育総合研究所 岡 田 明
- 732 聾学校児童生徒の語彙評価に関する実験的研究 (I)
福岡教育大学 南 出 好 史
- 733 聾学校児童生徒の語彙評価に関する実験的研究 (II)
福岡教育大学 石 井 武 士
- 734 音響, 色彩, 発声に関する研究 (I)
長崎大学 重 永 幸 男

I 発表と討論の経過

船津(727)に対し松下(愛知教育大)より、構音訓練の結果自発的発話量の増加やコミュニケーションが活発化するなどの効果が認められたとしているが構音の改善はどうかとの質問があり、これに対し、構音の改善もみられるが、コミュニケーション全体の活発さ、積極さをより重視しており、この面での効果も見られたと回答された。岡田(特殊教育総合研究所)より、

語音の構音の容易さの順序の精薄児と正常児との違いについて質問があり、一部分入れ替る所もみられるが両群の全体の傾向は似ていると答えた。

松下(728)に対し関田(都身障福祉センター)より、テスト項目選定基準と被験者の聴力のチェックについて質問があり、テスト項目はCV.V音節でCのみが異なる音節対の中から過去の使用経験により被験者についての弁別性の高い項目を選択して用いたこと、被験者の聴力のチェックは弁別能力の著しく劣る者についてのみ頑具を用いた大まかなチェックをただけで正式な聴力検査はやっていないと回答があった。

野口(729)に対し関田から、本児の構音の状態から高音部の聴力に問題があるように思われるが聴力の状態はどうかとの質問があり、これに対し発表者は日常生活の観察から聴力の異常はないと思うと答えた。これに対し重永(長崎大)から聴力の型を調べておく必要があるとの意見が出された。

坂本(730)に対し、岡田より表2の分類について質問があり、村田氏の分類を参考にしたこと、「感覚」(痛いなどの感覚についての報告)、「状態」の分類項目は発表スライドでは「報告」にまとめてあると答えた。また、関田からの、被験者は身振語から音声言語へと発達して来ているのに対し指文字、身振りを取り入れた方がよいとしているが、音声言語を手掛りとして指導した方がよいのではないかと意見に対し、全体の教育方針と関係する問題であるが、発声が出てきていることは今後の指導の手掛りになるとは考えているとの回答があった。

南出、石井(732, 733)に、岡田より、語彙検査の内容について質問があり、これに対しいくつかの聾学校から出た語彙表やその他いくつかの研究者の出した

語彙表, 5種程の児童用国語辞典中の重要かつ基本的な語と印されたもののそれぞれの全語数中の割合などを考えて各語に重みづけを行い, それに従って選定したものを基本的で重要なものと考え, これらを音節数, 読話の容易さなどを考慮してリストを作ったと答えた。

重永(734)に対し岡田から色彩明度と対応する音の周波数との関係が一般的傾向と異なる被験者を訓練対象とする時の取扱いについて質問があり, 発売指導に用いる場合, そのような子どもには適用できないだろうと回答された。

II 討論の経過

1) 障害児を対象とした実験的, 統計的研究と臨床的研究との関連について, 2) 構音検査や訓練などに用いる刺激単語の Familiarity について, 3) 音声言語の獲得と身振り語, 指文字の使用についての3点にまとめ討論をすすめた。

1) 研究方法の問題

岡田は障害児教育の領域では臨床的扱いが中心となる。因子分析などの研究方法もあるレベルでは必要であるが, 臨床に各個の中に入っていかなくてはならないので, そのようなアプローチには限界があらう。どのようなレベルでどのような方法をとるかを考えておく必要があらうと述べ, 坂本は臨床的研究と基礎的研究との組合せが必要であり, 臨床的研究では常にその問題が一般的理論にどのように位置づけられるかを意識している必要があるとし, 基礎的研究では診断や治療にどのように寄与できるかを考えておく必要があらうと述べた。

臨床報告での資料の客観性と信頼性を高めること, この領域での基礎的研究が一層充実される必要があることが強調された。

2) 刺激語の Familiarity の問題

船津は精薄児の構音を評価する時, 同一施設に入所している被験者を用い, 生活空間, 社会的経験などの背景がほぼ等しいので, そこで知っていることば, 身のまわりの物の名称を用いることにより刺激語の Familiarity は同じと仮定できるとし, コントロール群と一致するかいなかは不明であるが, 一致させる必要はなからうと述べ, これに対し, 生活空間が同じであっても Familiarity が等しいとは仮定できない(松

下), また, 聾児の場合 Familiar なことばの方が明瞭度が高くなることから Familiarity の統制が必要とならう(坂本)との意見が出された。また, 訓練に用いる材料に関して鹿取(東京大)は Familiar な材料を用いるべきかどうかは子どものレベルにより異なる, ある場合には無意味音節などを用いる必要もあるが, どの段階でどのような材料を用いるかが問題とならうと指摘した。

構音評価を行う場合, 被験者がよく見聞きしていることばということで扱って問題はなからう。

3) 身振り, 手話, 指文字の使用と音声言語獲得の問題

坂本は手話か口話かというとらえ方ではなく Total communication の考え方をとる。言語はスピーチのみではないし, スピーチからしか入らないというわけではない。知的発達全体の上に言語が獲得され, ある段階から言語が発達を促すようになると考えれば, 親と子の間で認知的, 知的なものを育てる前言語的段階を作りあげることが重要となる。そして内からの要求に対して言語形式を与えていく。また, 身振りが多義的になって通じなくなる時指文字などを導入するが, この時, 日本語の言語体系との関連を考えねばならない。鹿取は入力処理する能力機能が作られれば自然の身振りサインから音声言語へと切り替えられるのであり, 野口の報告の例にもこの辺のことが示されるが, 何が充足すればこの切り替えが可能になるのか明らかになってない。言語訓練のみではなく, 認知的, 視覚的処理で入力を分解して組立てる作業から言語に置き換えていくことを系統的に研究する必要があると述べた。

III まとめ

8編の発表は何らかの意味で言語発達に関係するものであったが相互の共通性は低く, 互にデータをもとにして討議を深めることができなかったことは残念であった。どのような研究方法をとるにしても, 言語産出面についてのみではなく, いろいろな経路での情報処理のメカニズムについて, つっこんだ研究がなされ, 子どもの水準により, どのような刺激を用いることが効果的であるかを明らかにするような研究が望まれる。(石井武士・松下 淑)